

旅先の机記

浦野裕司

旅先で、意匠の異なる三台の机に出会った。一台目は、御影石で作られた水木しげるの机。二台目は小泉八雲愛用の机。そしてもう一台は、正岡子規が晩年に使用した文机である。いずれも、三人それぞれの生前の姿が偲ばれる特徴のある机だった。

御影石の机／水木しげる

二月半ば、「おいしいカニが食べたい」という妻のひと言をきっかけに、山陰地方の小旅行に出かけた。旅の初日、鳥取の境港で妖怪たちの世界に遊ぶ。境港駅に着くと、駅前に御影石で作られた立派な机があった。その机で水木し

げる氏が漫画を描き、鬼太郎やねずみ男がその様子をのんびり眺めている。この先、自分がどんな風に描かれるのかと興味深げな様子だ。

その机の周りをぐるりと回って見たら、霊界で妖怪たちと語らいながら漫画を描く水木しげるの墓標のように思えてきた。どんよりと曇った冬の午後だったが、墓標の辺りだけは暖かな空気に包まれているように感じられた。

駅からは「水木しげるロード」が八百メートルほど続き、所々にブロンズ製の妖怪が設置されている。子どもの頃にテレビアニメで出会った妖怪たちの姿が、ここにもあそこにも。半世紀以上前の記憶が次々に蘇り、懐かしくも新鮮

な不思議な時間を過ごすことができた。

ちよつと寄り道／出雲大社

境港からJR境線の「鬼太郎列車」で米子に向かい、皆生温泉に宿泊した。翌朝、米子からJR山陰本線「特急やくも」と一畑電車を乗り継いで出雲大社へ向かう。妖怪の街から一転、神様のもとという節操のなさば許していただくことにして、境内の神聖な雰囲気には心洗われた。出雲大社では机との出会いはなかったけれど、広い境内のあちこちで、なんとも愛らしい兎たちに出会った。古からの荘厳な社と現代風のデザインの兎像とが、思いのほか調和している。大国主命を慕う兎たちの姿とさまざまな表情に安らぎを得て、出雲大社を後にした。



高い机／小泉八雲

旅の三日目に会ったのは、小泉八雲の机である。

玉造温泉から、バスで松江城のお堀端に向かい、遊覧船の船着場まで歩く。待つこと十分。堀巡りの屋形船に乗る客は私たち夫婦のみ。貸し切り状態で、ゆつくりと松江城の堀を巡る。

この日は冷たい北風が吹き荒んでいた。老齢の船頭さんはわずかに二人の客のために、寒風に耐えながら案内してくれた。ありがたいことに船内には炬燵が設置されていて、船頭さんには申し訳なかったが、快適な堀巡りを楽しませてもらった。

堀を一周し、出発した船着場に戻る。ときおり小雪が舞う中、近くの小泉八雲記念館を訪ねた。ここで、不思議な机を目にすることになる。小泉八雲について知っているのは、ギリシャ人、日本に帰化する前の名前のラフカディオ・ハーン、耳なし芳一、雪女……。断片的な知識しか持ち合わせていない。記念館の展示を見て、八雲の生涯を知り、なんと数奇な人生を送ったのかと、驚くばかりだった。

展示品の中でとりわけ印象深かったのが、八雲が使っていたという机である。八雲愛用の机は、ひと目見るや、椅子とのバランスがおかしいことが気になった。椅子はごく普通の高さなのに、机の方はやたら高い。私が椅子に座っ

たならば、天板に胸の辺りがきそうな高さだ。八雲は小柄で、身長は156cm前後だったらしい。であるならば、天板に届くのは脇の下あたりだろう。それでは机として、あまりにも使い勝手が悪いのではないか。なぜ、こんなに高い机を使っていたのだろう。

不思議に思い解説を読むと、八雲は十六歳の時に遊んでいて縄の先が左目に入り、その視力を失ったという。右目もかなりの近視だったらしい。そのため、標準的な机よりも30cmほど高い脚長の机が作られた。その机で八雲は、天板に顔をくっつけるようにして、文字を読み書きしていたそう。苦勞をしながら、資料や原稿用紙に向かう八雲の姿。その様子を想像しながら作品を読み返せば、作品に一層の厚みや凄みを感じられるのではないだろうか。

(注) 記念館内部は写真撮影禁止だったため、八雲の机の写真は掲載していない。小泉八雲記念館HP (<https://www.hearn-museum-matsue.jp>) の収蔵品のコーナーを) ご覧いただきたい。

四角い切れ込みのある文机／正岡子規

山陰の旅を終えて、次はどこへ行こうかと考えていると、「おいしい鰹が食べたい」、「温泉に入りたい」と妻が呟く。

れ込みが、俳句革新の道を歩む子規を支えた。脊椎カリエスのため伸ばせない膝を曲げたまま、文机に向かえるよう切り抜いたものらしい。

腰や足の激しい痛みには耐えながら、この狭い空間に膝を押し込んで数多くの俳句や俳句論を残した正岡子規。その姿には鬼気迫るものがあつたに違いない。

夜を寒み脊骨のいたき机かな 子規

(明治二十九年秋)



玄関を入ってすぐ、右手に文机があつた。「もしやこれは子規が使っていたものではないか」と近づく。子規庵(東京根岸)を模した一角に、子規の文机の複製が展示してあつた。

寝たきりになる前の一時期、天板の左側にある四角い切